『完成せるヨーガの環』第１章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト

森　雅秀

使用した文献資料および略号

a）サンスクリット写本

アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta（11世紀後半-1125？）による『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī* のサンスクリット写本は、現在、以下の24本の存在が確認されている。このうち、* を付したものは筆者未見のものである。写本の配列の順序は Bühnemann & Tachikawa（1991）に従った。未見の写本のデータも同書による。なお、B1、B2 およびD1、D2 はそれぞれ同一の写本である。

A*：Niṣpannayogāmbaratantra. 東洋研究所（Oriental Institute, Baroda）所蔵。Serial no. 44, acc. no. 13175, Nambiyar（1950：1462-1463）参照。

B1*：Niṣpannayogāmbaratantra. 同研究所所蔵。Serial no. 45, acc. no. 13280. Nambiyar（1950：1462-1463）参照。

B2：Niṣpannayogāmbalī. ケンブリッジ大学図書館（Cambridge University Library）所蔵。Add. 1279. 82葉、奥書に N.S. 995（西暦1875年）の年代がある。Bendall（1883：40）を参照。この写本は Bhattacharyya による校訂本（1972）でもＢとして用いられている。

C：Niṣpannayogāmbalī. アシャ古文書館（Asha Archives, Kathmandu）所蔵。No. 2-146. 116葉、奥書に N.S. 1020（西暦1900年）の年代がある。

D1：Niṣpannayogāmbalī. 同館所蔵。No. 2-262. 102葉、奥書に N.S. 931（西暦1811年）の年代がある。

E：Niṣpannayogāvalī. 国立古文書館（National Archives, Kathmandu）所蔵。No. 1/1113. 77葉、奥書に N.S. 686（西暦1566年）の年代がある。Bühnemann & Tachikawa（1991）において影印版が刊行されている。

F：Niṣpannayogāvalī. 同館所蔵。No. 3/1590. 52葉、奥書に N.S. 1018（西暦1898年）の年代がある。

G：Niṣpannayogāvalī. 同館所蔵。No. 3/687. 76葉、奥書に N.S. 320（西暦1200年）の年代がある。Bühnemann & Tachikawa（1991）において影印版が刊行されている。

H：Niṣpannayogāvalī. 同館所蔵。No. 4/2. 66葉。

I：Niṣpannayogāvalī. 同館所蔵。No. 4/1029. 124葉、奥書に N.S. 932（西暦1812年）の年代がある。

J*：Yogāmbaratantra. 王立アジア協会（Royal Asiatic Society, London）所蔵。No. 39. 27葉。Cowell & Eggeling（1875：31）参照。

K*：Niṣpannayogāmvalī. 同協会所蔵。No. 73. 66葉、奥書に N.S. 944（西暦1824年）の年代がある。Cowell & Eggeling（1875：47）参照。

L：（タイトル不明）仏教徒協会（Buddhist Library, Nagoya）によってマイクロフィルムが公開されている（Takaoka 1981：No. A25）。74葉、奥書に N.S. 985（西暦1865年）の年代がある。

M：Niṣpannayogāmvalī. 同上（Takaoka 1981：No. CA8）。97葉、奥書に N.S. 1013（西暦1918年）の年代がある。

N：（タイトル不明）同上（Takaoka 1981：No. CH17）。91葉、奥書に N.S. 980（西暦1860年）の年代がある。Yoshizaki（1992：No. 3900）にもあげられている。

D2：Niṣpannayogāmvalī. 同上（Takaoka 1981：No. CH364）。D1と同一の写本。

O：Niṣpannayogāmvalī. 同上（Takaoka 1981：No. DH293）。91葉、奥書に N.S. 834（？）（西暦1714年）の年代がある。

P*：（タイトル不明）世界宗教高等研究所（Institute for Advanced Studies of World Religion, New York）によってマイクロフィッシュが公開されている（IASWR 1975：MBB-I-144）。72葉。

Q：Maṇḍalaprakriyā. 同上（IASWR 1975：MBB-Ⅱ-118）。116葉。

R：Maṇḍalāvalī. 同上（IASWR 1975：MBB-Ⅱ-224）。110葉。

S*：Niṣpannakramasādhanopāyikāvasantatilaka. 同上（IASWR 1971：MBB-Ⅱ-17）。11葉。

T*：Niṣpannayogāmbarasaptaviṃśatimaṇḍalasya saṃgrahe. 同上（IASWR 1971：WSG-20）。90葉。

U*：Niṣpannayogambalī. 国立図書館（Bibliothéque National, Paris）所蔵。Fonds Sanskrit 64. 71葉、奥書に N.S. 956（西暦1836年）の年代がある。Filliozat（1941：58）参照。Mallmann（1964：216-222）において、テキスト校訂のために用いられ、異読が校註に示されている。

V：Niṣpannayogāmbalī. 東京大学図書館所蔵。No. 215. 98葉。Matsunami（1965：84）参照。

W：Niṣpannayogāmbalī. 同館所蔵。No. 216. 134葉。Matsunami（1965：84）参照。

X：Niṣpannayogāmbalī. 同館所蔵。No. 217. 116葉、奥書に N.S. 829（西暦1709年）の年代

がある。Matsunami（1965：85）参照。

	Skt.	Tib.	漢　訳
1	Mañjuvajra	'Jam pa'i rdo rje	
2	Vairocana	rNam par snang mdzad	大毘盧遮那
3	Ratnasambhava	Rin chen 'byung ldan	宝生
4	Amitābha[1]	sNang ba mtha' yas	
5	Amoghasiddhi	Don yod grub pa	不空成就
6	Locanā	sPyan ma	仏眼
7	Māmakī	Mā ma kī	摩摩枳
8	Pāṇḍarā	Gos dkar mo	白衣
9	Tārā	sGrol ma	多羅
10	Rūpavajrā	gZugs rdo rje ma	金剛色
11	Śabdavajrā	sGra rdo rje ma	金剛声
12	Gandhavajrā	Dri rdo rje ma	金剛香
13	Rasavajrā	Ro rdo rje ma	金剛味
14	Sparśavajrā	Reg bya rdo rje ma	金剛触
15	Dharmadhātuvajrā	Chos kyi dbyings kyi rdo rje ma	金剛法界自性
16	Yamāntaka	gShin rje mthar byed	焔鬘得迦
17	Prajñāntaka	Shes rab mthar byed	鉢囉研得迦
18	Padmāntaka	Padma mthar byed	鉢訥得迦
19	Vighnāntaka	bGegs mthar byed	尾覲難得迦

1) VA : Amitanātha（mGon po 'od dpag med）

表１　『完成せるヨーガの環』第一章の諸尊尊名リスト

サンスクリット、およびチベット語の名称はNPYに説かれたもの。漢訳名は『一切如来金剛三業最上秘密大教王経』（大正蔵　第885番、pp.470-471）に従った。なお４のAmitābhaは『秘密集会タントラ』ではAmitāyus（無量寿）である。

b）チベット訳版本

D : 'Jigs med 'byung gnas sbas pa, *rDzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba,* No. 3962, phu 94b, 5-151a, 7.

N : ——, ——, No. 1557, thu 109a, 6-175a, 2.

P : ——, ——, TTP, No. 3962, Vol. 80, 126.3.4-154.2.8.

P_2 : ——, *dPal 'jam pa'i rdo rje mngon par rtogs pa kun las btus pa rdzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba,* TTP, No. 5023, Vol. 87, 47.5.6-77.4.5.

* デルゲ版は高野山大学図書館所蔵、ナルタン版はインド省図書室（Oriental and India Office Collections, London）所蔵の版本をそれぞれ使用した。

C）その他

Abhayākaragupta, *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā,* TTP, No. 3961, Vol. 80, 79.1.1-126.3.4.

Bhatt.: Bhattacharyya, B. 1972（1949）*Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta.* Gaekward's Oriental Series No. 109. Baroda : Oriental Institute.

Blo bsang chos kyi rgyal mtshan [Paṇ chen bla ma I], *rDo rje phreng ba'i dkyil 'khor chen po bzhi bcu rtsa gnyis kyi rsgrub thab, Rin chen dbang gi rgyal po'i phreng ba,* Paṇ chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan gsung 'bum Vol. 2. New Delhi : Mongolian Lama Gurudeva (hand-written copy from prints of the Tashilumpo blocks).

Dīpaṃkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi,* TTP, No. 2675, Vol. 62, 12.1.4.-18.3.6.

GDK : *rGyud sde kun btus.*

Ngag dbang blo bsang chos ldan [lCang skya I], *rDzogs 'phreng dang rdors 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rim pa lag tu blangs bde bar dgod pa,* TTP, No. 6236, Vol. 162, 181.1.1-Vol. 163, 22.4.3-178.3.7.

Ngag dbang legs grub, *dPal gsang ba 'dus pa'i rdo rje'i dkyil 'khor gyi cho ga si tā'i glung chen 'jigs bral seng ge'i kha babs,* rGyud sde kun btus. Delhi : N. Lungtok & N. Gyaltsan, Vo. 7, ff. 485-651.

NPY : *Niṣpannayogāvalī.*

Ratnākaraśānti, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhiṭīkā,* TTP, No. 2734, Vol. 65, 141.2.6-178.3.7.

Skt.: Sanskrit.

Tib. : Tibetan.

TTP : Tibetan Tripiṭaka, the Peking Edition, Suzuki Foundation.

VA : *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā.*

Vitapāda, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikāṭīkā,* TTP, No. 2736, Vol. 65, 201.3.6-221.5.8.

大正蔵：大正新脩大蔵経。

凡 例

1　和訳は B. Bhattacharyya による校訂本（1972）と、現存するサンスクリット写本17本を用いて校訂したテキストにもとづく。各写本の略号および主要なデータは前節参照。

2　チベット訳テキストとして、北京版（P）、デルゲ（D）、ナルタン版（N）の三版を校訂したテキストを用いた。後掲のチベット訳テキスト中の（　）内の数字は北京版の頁、葉の開始箇処を示す。また、北京版にのみ含まれる Śākyaśribhadra による異訳（P_2）も参照した。

3　NPY に先行し、アバヤーカラグプタが NPY 執筆に際して参照したと考えられる Dīpaṅkarabhadra による『秘密集会マンダラ儀軌（マンダラ儀軌四百五十頌）』（TTP, No. 2728）と、Ratnākaraśānti による同儀軌の註釈書『秘密集会マンダラ儀軌註』（TTP, No. 2734）を参照した。NPY, VA とこれら二文献との関係は、拙稿（1992a）参照。

4　NPY への註釈書として、パンチェンⅠ世の『ヴァジュラーヴァリーの四十二種の大マンダラ成就法〈宝自在王の花環〉』、チャンキャⅠ世（ガワン・ロサンチューデン）の著作（TTP, No. 6236）を参照し、NPY との異同等は訳註に記した。これら二つの文献については、拙稿（1989：236）参照。また、プトンによる『秘密集会文殊金剛成就法』、『秘密集会文殊金剛マンダラ儀軌』（東北　第5089、5090番）、GDK に含まれる『秘密集会ジュニャーナパーダ流文殊金剛19尊マンダラ』（著者はガワン・レクドゥップ）もあわせて参照した。これらの諸文献については、前節を参照されたい。

5　NPY の第１章の現代語訳として Meisezahl による独訳（1976）と、Mallmann による仏訳（1964：69-74）がある。ただし Mallmann による翻訳は冒頭と末尾の部分を欠く。

6　本文の内容の理解をはかるために（　）内に説明の語句、原語、漢訳語などを示した。翻訳上補った語句は〔　〕内に入れた。内容に応じて段落を分け、見出しを付けた。段落の区分と見出しの語句は、立川（1993）に従った。

7　これまでの NPY の研究成果については、塚本他編（1989：380-382）にまとめられている。また、サンスクリット写本については Bühnemann & Tachikawa（1991）に詳しい。

和 訳

〔1　マンダラの外郭部の観想〕

〔1．1　世尊の言葉〕

繊細にして中庸を得た次第によって三昧を正しく修習し、現世において最高の智慧を獲得した者に関して[1]、世尊は

> 広観と斂観を行なう者はあらゆる形相の最高のものをそなえる。智慧がすみやかに完成することが「完成せるヨーガ」といわれる

とお説きになっている。

〔1．2　予備的な観想〕

このことについて〔述べる〕。自分自身とすべての生類が金剛持の位を獲得するよう

努力する者は、蘊（skandha）、界（dhātu）、感官（āyatana）などが影像であり、空性と同じものであることを確証する。そして、光輝くものに遍入し、すみやかに、周囲の部分をそなえた楼閣を中心とするマンダラとマンダラの諸尊とによって囲まれ、部族主を〔頭に〕飾り、胸の種子と結びつき[2]、空性と慈悲とがひとつになった大楽からなり、文殊金剛 Mañjuvajra などの姿をした金剛薩埵 Vajrasattva となった者は、無数の如来、女尊、菩薩、忿怒尊たちを拡散させながら、法を説くことなどによって、適宜、利他をなし、善行を実践し、〔如来たちを〕収斂させながら、不可思議なる身体を生じさせる。

〔１．３　外郭部の観想[3]〕

この場合、「この支分云々[4]」というのは、地面の下の果てまで、望むままの大きさを持ち、ひとつの堅固な固まりとなり、輝く金剛の自性からなる大地と、劫末の炎で輝く光の輪をそなえた境界、大地の底から上端に至るまでのきわめて高く堅固な輝く金剛墻、金剛墻の上には途切れなくひとつの集まりとなった金剛の矢の網が、下には金剛の天蓋に飾られた金剛籠がある。その中にある雑色蓮華と月輪にのる輪は、十輻をそなえ、黄色で右まわりに回る[5]。

〔１．４　十忿怒尊の観想[6]〕

1.4.1　その〔守護輪の〕東の輻には黒い身色のヤマーンタカがいる。顔は白と赤で、黒い金剛の槌と剣、宝、蓮華を持つ[7]。

1.4.2　南の輻には白いプラジュニャーンタカ。顔は黒と赤。金剛杵をつけた白い杖、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.3　西の輻には赤いパドマーンタカ。顔は黒と白。赤い蓮華、剣、宝、輪を持つ。

1.4.4　北の輻には黒いヴィグナーンタカ。顔は白と赤。忿怒金剛杵[8]、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.5　南東には青いタッキラージャ。顔は白と赤。鉤、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.6　南西には黒いニーラダンダ。顔は白と赤。青い棒、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.7　北西には黒いマハーバラ。顔は白と赤。三又戟、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.8　北東には青いアチャラ。顔は白と赤。剣、金剛杵[9]、宝、蓮華を持つ。

1.4.9　上方には黄色いウシュニーシャチャクラヴァルティン。顔は青と赤[10]。黄色い輪、剣、宝、蓮華を持つ。

1.4.10　下方には青いスンバラージャ[11]。顔は白と赤。金剛杵、剣、宝、蓮華を持つ。

〔１．４．11　十忿怒尊の一般的特徴〕

これら〔十忿怒尊〕のうち、ウシュニーシャチャクラヴァルティン、タッキラージャ、

アチャラ、スンバラージャは宝冠をつけ、種々の宝石を飾り、柔和で少しだけ牙をむく。ひげはない。他の〔六尊〕はみにくい姿をし、眉毛は折れ曲がり、褐色の髪は逆立ち、眉とひげも褐色である。口を大きくあけて牙をむき、舌を曲げ、牙はとても長く、大笑する。恐ろしい八匹のナーガ[12]（nāga）を飾る。短軀で鼓腹である[13]。

これらの十尊は展左（pratyālīḍha）の姿勢をとり、〔守護輪の〕輻の端にわずかに接した雑色蓮華と日輪の座にどっしりと座す。太陽の光をそなえ、たいへん恐ろしい姿で輝き、劫末の炎に輝く顔をし、自分自身の姿を変化させてできた無数の眷族たちとともに、無限の三界に住するすべての障礙の群れを、余すところなく繰り返し根こそぎにする。

六臂の中の主要な二臂で、自らと似た姿をした明妃を抱擁する[14]。三面の〔色の〕ちがいは、中央の面は身色と同じであるので、右と左の面の色のみ述べた。各々の面には赤く丸い目が三つずつある。

〔1．5　楼閣に至る観想〕

輪（＝守護輪）はたえまなくはげしく回転しているが、〔どっしりしているので〕動いていないように見える。無数の輝きのかたまりを拡散させている。

その中央部分の中で、下の輻の上に三角で巨大な法源[15]（dharmodaya）があり、その下の角にある雑色蓮華の上に羯摩杵がある。この金剛杵の四方の鈷と中心部（vedi）は、順に大日以下の〔五仏の〕身色と同じ色である[16]。そこには五色の宝を完備した牟尼（muni）の王の輝くマンダラと、さまざまな部分をそなえたすべての方角の輪[17]を持つ楼閣がある。

〔2　マンダラの諸尊の観想〕

〔2．1　文殊金剛〕

その中央に世尊金剛薩埵がいる。文殊金剛の姿をとる。身色はクンクマの色のようで、右と左の面は黒と白である。主要な二臂で自分とよく似た姿の明妃[18]を抱く。剣、弓、睡蓮、矢を持つ。宝冠をいただき[19]、種々の宝石などで荘厳する。究極の光をそなえる。

〔2．2　四仏〕

2.2.1　その東に大日がいる。身色は白で、右と左の面は黒と赤。手には白い八輻輪、剣、宝、蓮華を持つ。

2.2.2　南には宝生。身色は黄色。九角形のエメラルド、剣、輪、蓮華を持つ。

2.2.3　西には無量光。身色は赤。赤い蓮華、剣、宝、輪を持つ。

2.2.4　北には不空成就。身色は緑。剣、輪、宝、蓮華を持つ。

〔２．２．５　四仏の一般的規定〕

これらの三尊の右と左の面の色は黒と白である。これらの如来はいずれも宝冠をいただき、種々の宝石で荘厳する。

〔２．３　四妃〕

2.3.1　南東にはローチャナー。大日と同じ〔特徴〕である。

2.3.2　南西にはマーマキー。阿閦[20]と似て、赤い睡蓮、剣、蓮華を持つ。すべての成就法[21]にこのように説かれているからである。

2.3.3　北西にはパーンダラー。無量光と同じである。

2.3.4　北東にはターラー。不空成就と似て、黄色い睡蓮、剣、宝、蓮華を持つ。

〔２．４　六金剛女〕

2.4.1　中央の部分よりも外には、南東の隅に色金剛女がいる。大日に似て、宝の鏡、剣、宝、蓮華を持つ。

2.4.2　南西には声金剛女。阿閦に似て、青いヴィーナー、剣、宝、蓮華を持つ。

2.4.3　北西には香金剛女。宝生に似て、黄色いほら貝の容器、剣、輪[22]、蓮華を持つ。

2.4.4　北東には味金剛女。無量光に似て、赤い味の器、剣、宝、輪[23]を持つ。

2.4.5　東の門の左側には触金剛女。不空成就に似て、種々の衣、剣、宝、蓮華を持つ。

2.4.6　東の門の右側には法界金剛女。金剛薩埵[24]に似て、白い法源、剣、宝、蓮華を持つ。

〔２．５　諸尊の持物に関する一般的規定〕

文殊金剛以下のこれらの尊格は、三面六臂で、はじめのふたつの持物を右の二臂に持つ。残りのふたつを左の二臂に持つ。いずれも中央の面の色は身色と同じである。

〔２．６　四忿怒尊〕

東以下の門にはヤマーンタカ、プラジュニャーンタカ、パドマーンタカ、ヴィグナーンタカがいる[25]。

〔２．７　諸尊の一般的規定〕

文殊金剛、大日、女尊十尊は月輪に結跏趺坐を組む。他の尊は日輪の上に〔結跏趺坐を組む〕。月輪や日輪の下には雑色蓮華がある。

如来たちは主要な二臂で、自らと同じ姿の明妃を抱く。同様に女尊たちは自らと同じ姿の方便（＝男尊）を抱く[26]。

〔3　部族主の規定〕

3.1　各尊の頭には部族の主がある。文殊金剛以下の如来、マーマキー、声金剛女、守護輪上の八尊には阿閦である。

3.2　ローチャナー、色金剛女、ヤマーンタカには大日である。

3.3　香金剛女には宝生である。

3.4　パーンダラー、味金剛女、パドマーンタカには無量光である。

3.5　ターラー、触金剛女には不空成就である。

3.6　法界金剛女には金剛持である。〔金剛持ではなく〕阿閦であると言う者たちもいる。[27]

〔3．7　部族主としての金剛薩埵の特徴[28]〕

この場合、金剛薩埵は身色は白く、顔には赤みがさし、右と左の面は青と赤である。主要な二臂で、自らに似た姿の明妃を抱く。青い金剛杵、剣、宝、蓮華を持ち、雑色蓮華と月輪の座に金剛跏趺坐で坐す。月の光をそなえ、宝冠をいただく、宝の装飾品を身につけ、額には阿閦が印されている。

〔4　マントラの規定〕

4.1　この場合、文殊金剛の胸には三昧耶薩埵（samayasattva）に似た智慧薩埵（jñāna-sattva）がいる。その胸の月輪の上には、剣のつかに「maṃ」の種子がある。[29]

4.2　大日[30]、宝生、無量光、不空成就、阿閦の胸にはシンボル[31]（cihna）があり、〔その上の〕月輪もしくは日輪に、順にvuṃ, āṃ, hrīṃ, khaṃ, hūṃ[32]がのる。

4.3　ローチャナー以下の女尊については、lāṃ, māṃ, pāṃ, jaḥ, hūṃ, vaṃ, hoḥ, khaṃ, raṃ である。[33]

4.4　忿怒尊は hūṃ である。

4.5　尊格すべての心真言は『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvali* の中で述べた。[34]

〔4．6　補足説明〕

ここでは、ヨーガを完成した者が眼などの加持をすることと、智慧薩埵の招請と挿入などは説かれていない。それが無い場合でも、眼の知覚などの福徳からできたすぐれた身体をもった御本尊の、完全に清浄な形相をすべて一度に完成させた者にとって、悟りは確かなものであるからである。[35]心真言（hṛnmantra）などを示したのは「瓶の招請」（kalaśādhivāsana）などにおいて用いるためである。[36]

〔５　マンダラに関する一般的な規則〕

〔５．１　主尊と他の尊との位置関係〕

中央に別の如来を主尊とした場合、中央にいた尊は、その〔中央に移った尊の〕場所と入れ換える。無量光は〔主尊の場合〕身色は白になる。[37]

諸法は白い自性によるため、語の王（Vāgīśa＝無量光）は白い。[38]

と説かれているからである。この〔マンダラ〕も、後述するマンダラのいずれにおいても、マンダラの尊格が向く方角は、その尊がどこに位置していても、〔主尊が〕第一であるので、マンダラの王（＝主尊）の方を向く。[39]抱かれる尊はその〔相手〕に向かいあう。別の状態になるからである。[40]

〔５．２　マンダラの外郭部に関する補足説明〕

〔５．２．１　楼閣の三支分〕

この場合、楼閣の支分に三つある。金剛の大地などにまわりを囲まれた金剛籠、守護輪、法源である。このうち、金剛籠は、以下に述べる〔マンダラの〕すべての楼閣にある。守護輪と法源は特定のものだけに説く。[41]

〔５．２．２　法源と金剛杵輪〕

楼閣を描く場合、法界の本質である法源か、あるいは法界の中に〔法源は〕含まれるため、〔法界の〕先端を描くと『ヴァジュラーヴァリー』に述べた。[42]「外と同じように自分自身も」[43]といわれるので、究竟次第のマンダラを考案するために、鉄囲輪（cakravāḍa）の先端として金剛杵輪（vājrāvalī）を描くのは確かである。

〔５．２．３　守護輪に関する論議〕

〔５．２．３．１　守護輪を描かない理由〕

この場合、守護輪に関してはそうではなく、描く必要はない。障礙の追放は他の方法によっても行なわれるからである。すなわち、世尊は空性のみで障礙の群れを、主神[44]も含めて、残りなく根絶することができるため、このことについての堅固な信念を生ぜしめるために、描かれたマンダラには守護輪を描くとはお示しにならなかった。[45]観想上のマンダラの場合にも、観想するよう説かれているのは必ずしもすべての〔マンダラ〕においてではない。[46]

〔５．２．３．２　描かないことに関する誤った見解(1)〕

障礙を除去すれば、すぐに空性に至るため、観想上のマンダラの場合、守護輪は存在

しないため描かないのであるというならば、〔そうではない〕。それならば、鉄囲輪の先端も描かないことになってしまう。[47)]

〔５．２．３．３　描かないことに関する誤った見解(2)〕

あるいは、楼閣を生む時にそれ（守護輪）も生起させるというならば、そうではない。世尊は金剛墻を二度、生起させるなどとどこにも説いていないからである。二度、生起させてどうするというのか。一度、生起させるだけで、金剛の大地、境界、金剛墻などのすべてが空性の自性を持ち、幻を本質とする状態となる。そのため、守護輪は存在するのであるが、マンダラには描かないという理由が説かれているのである。

〔５．２．３．４　異説〕

一説では、ある〔マンダラ〕には守護輪を描くともいわれる。

以上が文殊金剛マンダラに関する〔規定である〕。

訳 註

1）「繊細にして中庸を得た次第」（mṛdumadhyākrama）をチベット訳テキストは、いずれも「短い次第と中程度の次第」と解釈する。また P_2 は「最高の智慧を獲得した者に対して、完成せるヨーガを示す」（shes rab mchog dang ldan pa la rdzogs pa'i rnal 'byor bstan to）と訳す（48.1.3-4）。

2）後の「４．マントラの規定」で述べられるように、観想の対象となる尊格の胸に、行者は各尊固有の種子マントラ（bījamantra）を置く。文殊金剛の場合、種子は maṃ で、シンボルである青い剣の上にのる。

3）マンダラの外郭部の構造については、拙稿（1992c）参照。

4）楼閣の支分を指す。後述されるように（5.2.1　楼閣の三支分）、楼閣の支分には金剛籠（vajrapañjara）、法源（dharmodaya）、守護輪（rakṣācakra）の三つがある。

5）守護輪を指す。守護輪については、拙稿（1992b）参照。

6）十忿怒尊（daśakrodha）はマンダラの楼閣の観想に至るまでの過程で守護輪にのった姿で観想される。実践の妨害をなすと考えられた障礙（vighna）を阻止するためである。十忿怒尊については、かつてそのイメージの変容を考察したことがある（森　1991a）。ジュニャーナパーダ流の十忿怒尊のイメージは、チベットやネパールでも受け継がれている。なお GDK は十忿怒尊を観想する順序として、下のスンバラージャと上のウシュニーシャチャクラヴァルティンから始め、ヤマーンタカ以下の四方の四尊、アチャラ以下等の四維の四尊をこれに続ける。また、四維の四尊は、アチャラが南東に置かれ、以下、タッキラージャが南西、ニーラダンダが北西、マハーバラが北東となり、NPY の以下の記述とは90度ずつずれている。

7）ヤマーンタカ以下の十忿怒尊の面色について、Bhattacharyya による校訂本では、身色と同じ色を面色のはじめに加えている（たとえば、ヤマーンタカの場合「身色は黒、面色は黒、赤、白」とする）。後述のように、三面の中央の面の色は身色に一致するため、この規定自体は誤りではないが、アバヤーカラが「右と左の面色のみ述べた」と記していることと矛盾する。今回、参照したサンスクリット写本の中で Bhattacharyya のテキストと一致するものはなく、彼が何に従ってこのような読みを示したかは不明である。なお、GDK やパンチェンⅠ世の儀軌などのチベット語の文献は、Bhattacharyya と同じように三つの面色をそろってあげている。

8）サンスクリットは krūravajra、チベット訳は khro bo'i rdo rje。鈷の先端を外側に開いた金剛杵。

9）GDK（503.4）では「輪」（'khor lo）。

10）GDK（503.4）では「白」（dkar）。

11）GDK（503.3）は尊名を「ヴァジュラスンバ」（rdo rje gnod mdzad）とする。

12）アナンタ、タクシャカ、マハーパドマ、カルコータカ、ヴァースキ、パドマ、シャンパーラ、クリカの八匹を指す（森　1989：255）。

13）GDK（505.1-3）は十忿怒をふたつのグループには分けず、まとめて身体的特徴を述べる。そのほんとどは、後者の六尊のグループの特徴に含まれる。

14）十忿怒尊の明妃の名は、NPY の第一章には現れないが、第二章「略集次第所説の阿閦マンダラ」では以下の十尊の名があげらている。ヴァジュラヴェーターリー、アパラージター、ブリクティー、エーカジャター、ヴィシュヴァヴァジュラー、ヴィシュヴァラトニー、ヴィシュヴァパドマー、ヴィシュヴァカルマー、ガガナヴァジュリニー、ダラニーダラー。

15）法源については Bahulkar（1979）、森（1992c：75-76）参照。

16）東が白（大日）、南が黄色（宝生）、西が赤（無量光）、北が緑（不空成就）、そして中央が青（阿閦）となる。これはマンダラの内庭を塗り分ける方法と同じである（田中　1987：123）。法源の中におかれたこの金剛杵（羯磨杵）は楼閣の下に位置するため、実際のマンダラではほとんど表現されないが、楼閣の四方のトーラナのまわりに、鈷の一部が描かれる（森 1992c：84）。

17）具体的にどの部分を指すかは不明。周囲の諸尊が配された部分を「輪」（cakra）とよんでいるのか。Dīpaṅkarabhadra の『四百五十頌』にも、楼閣に至る観想の過程で「四方の輪にさまざまな光」(phyogs kyi 'khor lo sna tshogs 'od）という記述がある(35.5.8)。Ratnākaraśānti はこれに註して「四方の輪とは四方の〔尊格の〕集まりである」（phyogs kyi 'khor lo ni phyogs kyi tshogs so）とする（147.2.4）。

18）GDK（544.2）は明妃の名称を「文殊金剛母」（'jam pa'i rdo rje ma）とする。田中（1987：196）は文殊金剛の明妃がマーマキーであると述べる。

19）パンチェンⅠ世は文殊金剛の部族主である阿閦が、宝冠とともに文殊金剛の額を飾ることを述べる（12.4）。これは大日以下の諸尊でも同様である。

20）ローチャーナー以下の十尊の女尊は、いずれも対応する如来に似た姿をとると規定される。これは面数、臂数、身色、面色についての規定であり、持物は異なる。その中でマーマキーと色金剛女は「阿閦に似る」と述べられているが、ここまでの NPY の記述には阿閦は登場しないため、具体的な特徴は明らかではない。ただし、部族主としての阿閦は後ほど登場し、また、中尊を文殊金剛以外の仏に変更した場合、文殊金剛にかわって阿閦がその尊と入れ替わるため（たとえば田中（1987：199）参照）、阿閦についても明確なイメージは存在したはずである。文殊金剛（金剛薩埵）と阿閦の同体説は註28）参照。なお、チャンキャはマーマキーの面色を青、白、赤と規定している（189.5.8-190.1.1）。

21）具体的にどの成就法を指すかは不明。聖者流の文献であるが、『五次第』はこれに近い尊容を説く（Poussin 1896：9；酒井 1956：79）。ただし持物の一部は一致しない。

22) GDK (546.3) は「宝」(rin po che)。
23) GDK (546.4) は「蓮華」(padma)。
24) 金剛薩埵は中尊の文殊金剛と同体であるが、ここまでの記述では具体的な尊容は説かれていない。後に部族主としての金剛薩埵の特徴が示される。文殊金剛とは身色、持物とも異なる。
25) ヤマーンタカ以下の四忿怒尊は、はじめの守護輪の観想の場面ですでに尊容が説かれているため、再説されていない。
26) 田中 (1987：196) のよれば、四方の如来の明妃はローチャナー以下の四妃、四維の明妃の相手は大日以下の四仏、六金剛女の相手は地蔵、金剛手、虚空蔵、観自在、除蓋障、普賢の六菩薩である。これらの六菩薩の名は Ratnākaraśānti もあげる (149.4.1)。
27) チャンキャは「金剛持」のかわりに「金剛薩埵」をあげ (190.3.1)、また阿閦説を示していない。
28) なぜここで金剛薩埵の尊容の説明を始めたのか、アバヤーカラは明確にしていないが、前段の法界金剛女の部族主である金剛持、あるいは阿閦の説明として付け加えていると考えられる。アバヤーカラグプタはこれらの三尊、金剛薩埵、金剛持、阿閦、そして文殊金剛の四尊を同体視していた。彼は VA の中でこの「文殊金剛マンダラ」を文殊金剛から阿閦や金剛薩埵にかえたマンダラに言及し (99.5.8)、その場合の阿閦は「文殊金剛と不可分である」と述べる (88.1.8)。また「『サンプタタントラ』に説かれる金剛薩埵は白色で、阿閦と一体にして一味である」という記述もみられる (99.3.1)。さらに NPY 第3章「サンプタタントラ所説の金剛薩埵マンダラ」において、アバヤーカラは中尊を「金剛持」とよぶ。VA では同じマンダラの中尊をマンダラの名称どおり金剛薩埵とする (100.2.4)。前註で示したように、チャンキャは法界金剛女の部族主として金剛薩埵のみをあげて、さらに「この金剛薩埵の身色は白く」と、この段落に続ける。
29) チャンキャは「自ら、文殊金剛の三昧耶薩埵の胸に、自らに似た智慧薩埵を〔おき〕、その胸の月輪にのった剣のつかに、月輪の上にのった maṃ 字を飾りとする三摩地薩埵 (tin nge 'dzin sems dpa') を〔おく〕。このように三種の薩埵をおくのである」と述べる (190.3.3-4)。三昧耶薩埵、智慧薩埵に三摩地薩埵を加えた観想法は、NPY の第3章 (Bhattacharyya 1972：9) や『五次第』にもみられる (酒井　1956：63-64)。
30) チャンキャは「大日」を欠く。
31) VA では儀礼のために描かれるマンダラが解説されるが、そこではマンダラの各尊は簡単なシンボル (cihna) におきかえられている。文殊金剛マンダラの場合、四仏のシンボルは大日以下、順に白い八輻輪、緑色の宝石、赤い八弁蓮華、緑の剣である (99.4.8f)。これは『秘密集会タントラ』第4章にあげられる各尊の「印」と同じである (大正蔵　第18巻、p.473c; Matsunaga　1978：14)。
32) GDK とチャンキャは hrīṃ ではなく、jrīṃ をあげる。jrīṃ とするサンスクリット写本もいくつかある。
33) チャンキャは大日の種子を四仏のところではなく、ローチャナーの前にあげる。またその種子も vuṃ ではなく oṃ である。
34) VA の「瓶の招請に関する儀軌」(kalaśādhivāsanavidhi) に述べられている (89.1.4ff)。以下はその該当箇処の全文である。

> 文殊金剛マンダラに関しては「オーム、アーハ、マム、フーム」というのが、阿閦と不可分であるマンダラの中尊(文殊金剛)のマントラである。(以下いずれのマントラも「オーム、アーハ、x、フーム」の形をとり、x の部分に各尊固有のマントラがおかれる。冗長となるので x のみを示す。)「ジャジク」大日のマントラ。「ラトナドリク」宝生。「アーローリク」無量光。「プラジュニャードリク」不空成就。「痴を喜ぶ者よ (moharati)」ロー

チャナー。「瞋を喜ぶ者よ（dveṣarati）」マーマキー。「貪を喜ぶ者よ（rāgarati）」パーンダラー。「金剛を喜ぶ者よ（vajrarati）」ターラー。「色金剛女よ、ジャハ」色金剛女。「声金剛女よ、フーム」声金剛女。「香金剛女よ、ヴァム」香金剛女。「味金剛女よ、ホーホ」味金剛女。「触金剛女よ、カム」触金剛女。「法界金剛女よ、ラム」法界金剛女。「ヤマーンタカよ」ヤマーンタカ。「プラジュニャーンタカよ」プラジュニャーンタカ。「パドマーンタカよ」パドマーンタカ。「ヴィグナーンタカよ」アムリタクンダリン（甘露軍荼梨）の〔マントラである〕。文殊金剛と不可分の阿閦が中尊の場合、〔マントラは〕「オーム、アーハ、ヴァジュラドリク、フーム」である。

35）この段落の意味は訳者には明らかではない。Ratnākaraśānti による『マンダラ儀軌註』には、マンダラの諸尊を観想した後、諸尊の目と身体の加持、智慧マンダラの招来と三昧耶マンダラへの挿入、各尊に対する灌頂などの記述があり、これによって諸尊の額に部族主が生じると言う（151.5.2ff）。また『サーダナ・マーラー』*Sādhanamālā* の第46番にも、同じように、諸尊の観想の後、智慧薩埵の挿入と目などの加持が、諸尊の灌頂などと並んで説かれている（Bhattacharyya　1968：96）。

36）註34）においても言及した「瓶の招請」は、マンダラの制作の過程で「障礙の除去」「ヴァスンダラー女尊の招請」につづいて行われ、アバヤーカラ自身が列挙する VA の50の項目の第10番目に位置している（森　1991ａ：55）。マンダラ中の尊格に対応する瓶と「一切事業の瓶」とよばれる瓶を、マンダラを描く地面に配置することを目的とする。設置する瓶の中の水に対して、対応するマントラを誦唱するため、アバヤーカラは主要なマンダラの各尊のマントラを、この章の中で紹介している。前註で引用したのは、そのはじめの部分である。

37）『秘密集会タントラ』には、無量寿（無量光ではない）を中尊とする「語マンダラ」（vāṅmaṇḍala）が説かれている（大正蔵　第18巻、p.497c,1978：86）。

38）出典は不明。同一の偈が VA にも登場する（99.3.1）。

39）Ratnākaraśānti の『マンダラ儀軌註』にも同様の規定がある（151.5.1）。

40）この部分は、訳者には文意が明らかではない。

41）守護輪が説かれるのは第１、２、３、20、21、24、25、26章の八種のマンダラに限られる。また法源は第４、12、24章の三種のマンダラでは言及されない（森　1992c：76）。

42）対応する記述が VA の中に以下のようにある（92.3.2ff）。

一説ではサンヴァラマンダラなどの特定のマンダラには、法源の観想は現れない。これは〔法源が〕法界の中に含まれるため、この線（訳者註：マンダラの外周部にある蓮弁の線）は、法界の先端の線となる。他の説では、〔この線は〕鉄囲輪を本質とするといわれる。

43）出典は不明。

44）障礙の主神とは、インドラをはじめとするヒンドゥー教の護方法（dikpāla）を指す（森 1992b：99）。

45）VA の「障礙を撃退する儀軌」（Vighnanivāraṇavidhi）には、守護輪を用いて障礙を根絶する方法の他に、次のような方法が述べられる。（125.3.5ff）。

大悲と一味である空性の三昧を絶え間なく観想する者には、無数の障礙も滅びる。そのため、このような者にとって〔障礙を撃退する〕方法は〔守護輪を用いる〕これではない。マンダラの輪が空性と一味であると堅固に念じる者にも、あらゆる障礙や他の害も難なく滅び去ってしまい、夢に現れることすらない。そのため、このような者にとってもその方法はこれではない。

46）註41）参照。

47）鉄囲輪の先端とは、蓮弁と金剛杵輪の間の線に相当する。

サンスクリット・テキスト

1.1 iha hi mṛdumadhyākramābhyāṃ subhāvitasamādher adhimātraparajñasya bhagavatā[1] sarvākāravaropetaḥ sphurat saṃhārakārakaḥ/

jhaṭiti jñānaniṣpanno yogo niṣpanna ucyate[2]//

1.2 sa hi tvaṃ[3] sarvasattvāṃś[4] ca vajradharatvaṃ prāpayitum atyutsāhavān[5] skandhadhātvāyatanādikaṃ pratibimbamayaṃ śūnyataikarasaṃ niścitya[6] prabhāsvaraṃ[7] praviśya jhaṭiti saparikarakūṭāgārodaramaṇḍalamāṇḍaleyaparikaritaḥ[8] kuleśabhūṣito hṛdbījayuktaḥ[9] śūnyatākaruṇaikarasamahāsukhamayaḥ[10] śrīvajrasattvo[11] mañjuvajrādirūpo 'parimitatathāgatadevībodhisattvakrodhādīn[12] sphārayan[13] dharmadeśanādibhir yathābhavyaṃ parahitāni kurvāṇāt[14] parapuṇyāvadhiṃsthāpayan[15] saṃharaṃś cācintyamūrttir udeti/

1.3 tatrāyaṃ parikarādiḥ/ ārasātalam abhimataprasarāsanaikasārā[16] jvalantī[17] vajramayībhūmiḥ kalpāntajvalavanmayūkhajvālāvalīsīmābandha[18] ārasātalam upary atyuccair ghananiviḍajvaladvajraprākārordhvaṃ[19] niḥsandhyekakhaṇḍībhūtam upari vajraśarajālādho[20] vajravitānamaṇḍitaṃ jvaladvajrapañjaraṃ tadabhyantarasthitaviśvābjasūryasthapitadakṣiṇāvarttabhramaddaśāracakraṃ[21]ca/

1.4.1 tatra pūrvasyām ārāyāṃ[22] yamāntakaḥ kṛṣṇaḥ sitaraktamukhaḥ[23] kṛṣṇavajramudgarakhaḍgamaṇikamaladhārī/

1.4.2 dakṣiṇasyāṃ[24] prajñāntakaḥ sitaḥ kṛṣṇaraktamukho vajrāṅkitasitadaṇḍāsimaṇipadmadhārī[25]/

1.4.3 paścimāyāṃ padmāntako[26] rakto nīlasitāsyo[27] raktapadmāsimaṇicakradhārī[28]/

1.4.4 uttarasyāṃ vighnāntakaḥ kṛṣṇaḥ sitaraktamukhaḥ[29] karālavajrāsimaṇipadmadhārī[30]/

1.4.5 āgneyām ṭakkirājo[31] nīlaḥ sitaraktāsyo[32] 'nkuśakhaḍgamaṇisarojadhārī/

1.4.6 nairṛtyāṃ nīladaṇḍaḥ kṛṣṇaḥ sitaraktāsyo[33] nīladaṇḍakhaḍgamaṇyabjadhārī/

1.4.7 vāyavyāṃ mahābalaḥ kṛṣṇaḥ sitaraktamukhaḥ[34] triśūlāsimaṇikamaladhārī/

1.4.8 aiśānyām acalo nīlakekaraḥ[35] sitaraktāsyaḥ[36] khaḍgavajramaṇipadmadhārī/

1.4.9 ūrdhvam[37] uṣṇīṣacakravarttī pīto nīlaraktāsysḥ[38] pītacakrakhaḍgamaṇipadmadhārī/

1.4.10 adhaḥ sumbharājo nīlaḥ sitaraktāsyo[39] vajrakhaḍgamaṇikamalabhṛt/

1.4.11 tatroṣṇīṣaṭakkyacalasumbhā ratnamukuṭino vicitraratnābharaṇā lalitā īṣaddarśitadaṃṣṭrā[40] vigataśmaśravaḥ/ tadanye vikṛtarūpā sabhrūbhaṅgāḥ[41] piṅgordhvakeśabhrūśmaśravo[42] vyāttadaṃṣṭrā[43] karālavaktrā lalajjihvā daṃṣṭro 'ṭṭaṭṭahāsinaḥ[44]

krūrāṣṭanāgabhūṣaṇā vāmanāḥ pīnās tundilāḥ/ daśāpy ete sahāsanair niścalāḥ[45] pratyālīḍhenārāgreṣv[46] īṣallagnaviśvābjasūryasthāḥ sūryaprabhāḥ saroṣaṇā jvalanto 'naladantā[47] 'tibhīmāḥ[48] pralayānalapratisamamayūkhamukhair[49] aparimitātmakamūrttinirmāṇaiś ca niravadhi dhātutrayeṣe[50] vighnaugham akhilam asakṛn nirmūlayantaḥ ṣaḍbhujāḥ pradhānabhujābhyāṃ svābhaprajñām ālingitās[51] trimukhāḥ/mukhaṃ tu mūlaṃ śarīravarṇaṃ savyavāmaṃ ca yathoktavarṇaṃ pratimukhaṃ raktavarttulatrinetram[52]/

1.5 cakraṃ cātibhramaṇān[53] niścalopamaṃ nirantaraṃ[54] sphuradanekajvālākalāpam/tasya nābhyantare[55] 'dhaḥśūkopari[56] viśālatrikoṇadharmodayāntādhaḥkoṇodgataviśvadalakamalopari[57] viśvakuliśasahitā tadvajrasya digārā yathāyogaṃ vairocanādisamavarṇā vedī ca[58]/ tasyāṃ pañcavarṇaratnapariniṣpannaṃ bhāsvān munīndramaṇḍalacitrāṃśuvyāptasarvadikcakraṃ[59] kūṭāgāram[60]/

2.1 tasya madhye bhagavān vajrasattvo[61] mañjuvajrarūpaḥ kuṅkumāruṇaḥ kṛṣṇasitasavyetaravadanaḥ[62] pradhānabhujābhyāṃ svābhaprajñāliṅgito[63] 'siśarendīvaracāpadharo ratnamukuṭī[64] vicitraratnādyābharaṇo 'ntābhaḥ[65]/

2.2.1 tasya pūrvasyāṃ diśi vairocanaḥ sitaḥ kṛṣṇaraktasavyetaramukhaḥ sitāṣṭāracakrāsimaṇikamaladharaḥ/

2.2.2 dakṣiṇasyāṃ[66] ratneśaḥ[67] pīto navāṃśamarakataratnāsicakrapadmadharaḥ/

2.2.3 paścimāyām amitābho raktaḥ[68] raktapadmāsimaṇicakradharaḥ[69]/

2.2.4 uttarasyām amoghasiddhir haritaḥ khaḍgacakramaṇikamaladharaḥ/

2.2.5 trayo 'mī kṛṣṇasitasavyetaravaktrāḥ/ sarve tathāgatā[70] ratnamukuṭino[71] vicitraratnābharaṇāḥ/

2.3.1 āgneyyāṃ locanā vairocanasamā[72]/

2.3.2 nairṛtyāṃ māmakī[73] akṣobhyasamā raktotpalāsimaṇipadmadharā[74] sarvasādhaneṣu tathā pāṭhāt[75]/

2.3.3 vāyavyāṃ pāṇḍarā amitābhasamā/

2.3.4 aiśānyāṃ tārā ratneśasamā pītotpalāsimaṇipadmadharā[76]/

2.4.1 ato garbhapuṭād bahir āgneyakoṇe rūpavajrā[77] vairocanasadṛśī ratnadarpaṇāsimaṇyabjadharā[78]/

2.4.2 nairṛtye śabdavajrā akṣobhyasamā nīlavīṇākṛpāṇamaṇyabjadharā/

2.4.3 vāyavye gandhavajrā ratneśasamā pītaśaṅkhāsicakrābjadharā[79]/

2.4.4 aiśānye rasavajrā[80] amitābhasadṛśī raktarasapātrāsimaṇicakradharā[81]/

2.4.5 prāgdvārottarapārśve sparśavajrā amoghasiddhisamā viśvavarṇavastrāsimaṇyabjadharā[82]/

2.4.6 prāgdvāradakṣiṇapārśve dharmadhātuvajrā[83] vajrasattvasamā[84] dhavaladharmodayāsimaṇyabjadharā[85]/

2.5 etā mañjuvajrādidevatās trivadanāḥ ṣaḍbhujā[86] ādyacihnadharaṃ[87] savyābhyām aparadvayaṃ[88] vāmābhyāṃ dadhānāḥ/ sarvatra mūlamukhaṃ śarīravarṇam eva/

2.6 pūrvādidvāreṣu yamāntakaprajñāntakapadmāntakāmṛtakuṇḍalayaḥ/

2.7 atra mañjuvajravairocanadaśadevyaś[89] candreṣu[90] vajraparyaṅkiṇo[91] 'nye sūryeṣu/ candrasūryataleṣu viśvapadmāni/ tathāgatāḥ pradhānadhujābhyāṃ svābhaprajñāliṅgitāḥ/ devyas tu svābham[92] upāyam/

3.1 kulādhipas[93] tu śirasi mañjuvajrāditathāgatamāmakīśabdavajrārakṣācakragatāṣṭakrodhānām[94] akṣobhyaḥ/

3.2 locanārūpavajrāyamāntakānāṃ[95] vairocanaḥ/

3.3 gandhavajrāyā ratneśaḥ/

3.4 pāṇḍarārasavajrāpadmāntakānām[96] amitābhaḥ/

3.5 tārāsparśavajrayor amoghasiddhiḥ/

3.6 dharmadhātuvajrāyā vajradharaḥ/ akṣobhya ity anye[97]/

3.7 vajrasattvo 'treṣadraktānuvidvasitavarṇo[98] nīlaraktasavyetaravaktraḥ pradhānabhujābhyāṃ svābhaprajñāliṅgito nīlavajrāsimaṇikamaladhārī viśvapadmaś candrāsano candraprabho vajraparyaṅkī ratnamukuṭī ratnābharaṇo 'kṣobhyamudritaḥ[99]/

4.1 iha mañjuvajrasya stanāntare samayasattvasadṛśaṃ[100] jñānasattvaṃ taddhṛccandre[101] khaḍgamuṣṭicandrasthaṃ mam bījam[102]/

4.2 śāśvataratneśāmitābhāmoghasiddhyakṣobhyānāṃ hṛdi cihnaṃ[103] yathāyogaṃ candre sūrye[104] vā/ vuṃ[105] āṃ hrīṃ[106] khaṃ hūṃ/

4.3 locanādidevīnāṃ/ lāṃ[107] māṃ pāṃ tāṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ khaṃ raṃ/

4.4 krodānāṃ hūṃ/

4.5 sarvadevatānāṃ hṛdayamantrā vajrāvalyām uktāḥ/

4.6 iha niṣpannayoginaś cakṣurādyadhiṣṭhānaṃ[108] jñānasattvapraveśādikaṃ[109] ca noktaṃ/ tadantareṇāpy[110] aparimitācintyacakṣurabhijñādiguṇagrāmaramaṇīyamūrtter[111] abhiṣṭadevatāyāḥ sakṛd[112] eva supariśuddhasarvākāraparinispatter[113] muhur muhur adhimokṣadārḍhyāt[114]/ hṛnmantrādikathanaṃ[115] tu kalaśādhivāsanādiṣu prayogārtham[116]/

5.1 yadā tu madhye 'nyas[117] tathāgato bhavati nāyakas tadā madhyasthitas[118] tasya[119] sthāne tiṣṭhet/ amitābhaḥ śubhro 'pi bhavati[120]/

śuklā dharmāḥ prakṛtyeti[121] vāgīśasyātra śuklatety ukteḥ/

iha vakṣyamāṇeṣu ca maṇḍaleṣu yasyā māṇḍaleyadevatāyā[122] mukhyato yatshānam

ucyate tasmin saiva pradhānatayā maṇḍaleśābhimukhī tadāliṅgitā tu tadabhimukhī aparasthānagamanāt[123]/

5.2.1 atra kūṭāgārasya[124] vajrabhūmyādiparikaritavajrapañjaraṃ[125] rakṣācakraṃ dharmodayā ceti trayaḥ parikarāḥ/ tatra vajrapañjaraṃ vakṣyamāṇānām[126] api[127] sarveṣāṃ kūtāgārāṇāṃ rakṣācakraṃ dharmodayā ca keṣāñcid[128] eveti/ vakṣyamāṇaḥ/

5.2.2 lekhyakūṭāgārāṇāṃ[129] tu dharmadhātusvarūpadharmodayāṃ[130] dharmadhātvantargatasya vā sūcakaṃ likhanam uktaṃ vajrāvalyāṃ/ yathā bāhyaṃ tathā 'dhyātmam[131] ity utpannakramamaṇḍalapratipādanākṛtena[132] lokadhātoś cakravāḍasūcakaṃ vajrāvalīlikhanaṃ ca niyamenaiva/

5.2.3.1 naivaṃ[133] rakṣācakram ato[134] na likhyate[135]/ vighnanivāraṇaṃ tv anyathā 'pi[136] kriyate/api ca śūnyataiva bhagavatī nikhilavighnaughaṃ samūlam unmūlayituṃ[137] prabhavatīti tadadhimokṣe dṛḍhatvaṃ[138] evādarotpādanāya rakṣācakralikhanaṃ[139] na varṇitam[140] lekhyamaṇḍaleṣu[141] bhāvyamaṇḍaleṣu tu kvacid eva tadbhāvanoktā[142] na sarveṣu/

5.2.3.2 vighnaghātānantaraṃ śūnyatāpraveśāt bhāvyamaṇḍale 'pi rakṣācakraṃ nāsty ato na likhyate caitat/ evaṃ tarhi vajraprākāram api cakravāḍasūcakaṃ na likhitavyam/

5.2.3.3 atha kūṭāgārotpattau[143] tad utpadyate/ naivaṃ[144] nahi bhagavatā[145] vajraprākārasya[146] dvitīyavārotpattiḥ kvacid uktā[147] /kiṃ vā dvirutpattyā[148]/sakṛd utpannam eva hi vajrabhūbandhavajraprākārādikaṃ[149] samastasamāropaśūnyatāsvabhāvaṃ māyāmayam upatiṣṭhaty[150] eva[151]/ vidyamānatve 'pi rakṣācakrasya maṇḍaleṣv alikhanopapattir uktaiva kaiścit tu[152]/

5.2.3.4 kvacid[153] rakṣācakram api likhituṃ saṃmanyate[154]/

iti mañjuvajramaṇḍale[155]//

テキスト校註

1. Bhatt. bhagavataḥ.
2. W *repeats* go niṣpanna ucyate *twice.*
3. V sva ; Bhatt. tvāṃ.
4. Q sarvasttvānāṃś.
5. Bhatt. °utsāhena ; V agohavān.
6. B Q niścitvat ; D G L N W niścityat ; E niścinvan ; M niścitvāt ; O niścitvaṃ ; V niścitvan
7. Bhatt. tatpra°.
8. Bhatt. °maṇḍaleman°; B °maṇḍaleya°; D L M N O Q R *omit* māṇḍaleya ; W *supplies* maṇḍala in margin.

9. B hṛtadbījamuktaḥ ; C N V hṛdijamuktaḥ ; D M O Q R X °muktaḥ.
10. Bhatt. °raso mahā°.
11. Q R °sattvavāgvajra.
12. Bhatt. °rūpāpari°.
13. Bhatt. sphārayet ; E G V spharan.
14. Bhatt. parahitaṃ vikurvāṇāt.
15. Bhatt. °sthāpayet.
16. B °prasārayaṇeka°; C X °prasarādyanaika°; M °prasarodyanaika°; N O °prasarodyaṇaika°; Q R °prasarāsavādyanaika°.
17. Bhatt. °dyanekaśo 'nantā.
18. Bhatt. tajjvalanmayūkha°; B O X vajramayibhūmistajvalavan°; C kalpāntānalajvalavan ; M jñamantīrathasadyemu + stajvalatsanavan°; N tatjvalakarmmamukhajvāvalī°; Q jñamaṃtrīrathasamdyaimurjstajvalamsanavan°; R jñamantrīrathasadyaimurddistakalansanavan.
19. C °jvaladvaladvajraprākāro vajraprākārordhvanidhva ; E O Q R W X *repeat* vajraprākāro *twice.*
20. Bhatt. B C N O Q X *omit* vajraśarajālādho.
21. Q *omits* dabhyanta.
22. C pūrvasyāy ārāmāyāṃ.
23. Bhatt. kṛṣṇasita°.
24. L dakṣiṇasyāmṇasyāṃ.
25. N °sitacandrāsi°; V vajrākitadaṇḍā°.
26. B C N O X *insert* sitaraktamukhaḥ kṛṣṇavajramudga *after* padmāntako.
27. Bhatt. raktaḥ rakanīla°; R rakto raktaḥ nīla°.
28. E G °dharaḥ ; V °dhārāḥ.
29. Bhatt. haritaḥ haritasita°.
30. B *omits* padma.
31. B ṭarkirājo ; O W ṭakkīrājo.
32. Bhatt. nīlasita°.
33. Bhatt. kṛṣṇasita°.
34. Bhatt. kṛṣṇasita°.
35. E G B nīlaḥ ; N nīlakevānīlaḥ ; O nīlakevarah ; W *supplies* kekaraḥ *in margin* ; Tib *reads* sngon po (= nīlaḥ).
36. Bhatt. nīlasita°.
37. Q *omits* ūrdhvam.
38. Bhatt. pītanīla°.
39. Bhatt. nīlasita°.
40. E °dramṣṭrā.
41. C *omits* sa.
42. Q *omits* sabhrūbhaṅgāḥ piṅgordhvake.
43. E W vyāvattadramṣṭrā ; V vyarstadraṣṭrā.
44. D nadantoṭṭaṭṭa°; E aṭaṭa°; G Q uṭahāsinaḥ ; L nadamṣṭ°; M R dantā 'ṭṭaṭṭa°; O

nadraṃṣṭro 'ttāta ; V utatahāsinaḥ ; W uttahāsinaḥ ; X nadaṃṣṭo 'ṭṭaṭṭa°.

45. B C N O X niścālāḥ.
46. Bhatt. °ḍenāgreṣu.
47. D E G L Q R U V W °nadantā.
48. Bhatt. iti bhīmāḥ.
49. Bhatt. *omits* sama ; D pralayānanenalaprati°.
50. Bhatt. B L N O °traye ; E °trayoṣu ; G V °trayīṣu.
51. Bhatt. E G °āliṅganatas ; V āliṅgata.
52. E G V W °varttulanetratrayaṃ.
53. Q R cātibhramabhraṇān ; V catritrasan ; W cātibhrasān.
54. D nīlaṃ taraṃ ; L nīlantaraṃ.
55. G nābyabyantare.
56. Bhatt. °dhaḥsūcikopari.
57. Bhatt. °koṇāntargata°; G °koṇadhavaradharṃ°; L N Q X °ntadhaḥ°; O °koṇe dharmodayāntadhaḥ°; V W °koṇadhavaradharmodayāntaradhaḥ°.
58. Bhatt. °varṇāś ca/ idaṃ ca.
59. Bhatt. bhāshamunī ; L *omits* cakraṃ.
60. D L M Q R *insert* saṃdumjaṃvidhorji *and* W *supplies it in margin.*
61. C N vajrasaṃdho ; D M Q R vajragandho ; W *supplies* ga *in margin and reads* vajragattvo ; W vajrasaṃdhye.
62. N °taracandanaḥ.
63. E G L Q °prajñām āliṅgito.
64. D L R °mukuṭa ; N O °mukuṭi ; Q °mukti.
65. Bhatt. E G V W 'nantābhḥ.
66. L *omits follwing two lines* (dakṣiṇasyām ... °cakradharaḥ).
67. E G V W ratnasaṃbhavaḥ.
68. B C X *omit* raktaḥ.
69. O *omits* maṇi.
70. B D O tathāgata ; C L N Q R X sarva tathāgata ; V sarva tathāgatā.
71. G V rakatmukuṭine.
72. B C D L Q R °samāḥ.
73. L N R māmaki.
74. G V ratnotpalā°.
75. W pīṭhāt.
76. L *omits* maṇi.
77. D R rūpavajra.
78. L °maṇyamimathekṛdharā ; Q maścakradharā.
79. V W pītagaṅdhaśankh° (= Tib.).
80. Q *omits* akṣobhyasamā ... rasavajrā.
81. Bhatt. B D L M N O R X *omit* maṇi ; D *supplies this line in margin* ; G W °sipadmadharā ; V °maṇipadmadharā.
82. G *omits* varṇa ; V viśvavaktrāsi.

83. L *omits* vajrā.
84. G *repeats* sattva *twice.*
85. N *omits* dhavala ; B O X dhavalarmoda° *and* X *supplies* dha *in margin* ; G V W *omit following three lines* (dharmodayā° ... sarvatramūla) *and* W *supplies them in margin.*
86. E *inserts* ātma.
87. Bhatt.°dharāḥ.
88. B aparamaparadvayaṃ.
89. Bhatt. °canāḥ sadevyaś ; B C N O X °canaśadevyaś.
90. V ceṣu.
91. L M Q °ṅkinyo.
92. V svābhavam.
93. M Q R U V W °dhipatis.
94. O *omits* rakṣā ; L O Q R °māmaki.
95. B C D M N Q R °rūpavajra.
96. B C D M Q R X °rasavajra.
97. V anena ; R X anya.
98. Bhatt. *omits* sita.
99. N °mudiṇaḥ.
100. L *omits* sattva.
101. V saddṛccandre.
102. B C N O ma.
103. N Q W cihne.
104. N Q candra sūrya.
105. L vaṃ ; Q yuṃ.
106. O Q R V X jrīṃ.
107. Bhatt. loṃ.
108. G cakṣurādhi°; V cakṣurdhi°.
109. G °praveśyadikaṃ.
110. V tadanaṃtar ; W tadanantar°.
111. C °guṇaḥ gr°.
112. B C X saṃkṛd ; V *reads* sakṛta *for* sakṛd eva.
113. Bhatt. °niṣpattir ; W *omits* pari.
114. C G M V W X dadyāt.
115. Bhatt. hṛdayaman°.
116. Bhatt. °dipuṇyayogārthaṃ ; B N O °dipuṣpayogārtham ; D L M Q R U °diṣu payogārtham.
117. N O anes.
118. N V madhye sth°.
119. V tata.
120. G bhavanti ; V bhavantiḥ.
121. V W prakṛtobhi.
122. B maṇḍalede°; L M maṇḍaleya°.

123. B °mukhodharasthāna°; C °mukhyavajradharathāna°; G W mukhyevapara°; M °mukhīvapara°; N tadamukhīvadharashāna°; O °mukhīvadharathāna°; Q R °mukhyāvapara°; X °mukhīvajradharashāna°.
124. D L U *omit* sya ; G °vajraparyaṅkañjara.
125. Bhatt. °ādiparito ; B C N O X *omit* kari ; L °parikalavajra°.
126. X vajramāṇānām.
127. V adhi.
128. Bhatt. *reads* tu *for* ca ; V cakreśāṃcid.
129. Bhatt. vakṣyamāṇalekhya°.
130. Bhatt. B C G N °dayāyāṃ ; O °dharmmācayāyāṃ ; G V *omit* sva ; W *supplies* sva *between lines.*
131. C X °dhyātmakam.
132. G V °pādanākūṭana ; V antakrama°.
133. Bhatt. niyamenaiva ; L V W niyamenaivaṃ.
134. Bhatt. °cakraṃ yato.
135. C likheta.
136. Bhatt. B C D N Q R X *omit* 'pi.
137. Q R vanmūla°.
138. B D Q X dṛḍhatva.
139. C X °likhane.
140. N *reads* sisvananaḥ va＋＋ *for* na varṇitam.
141. D M Q R *omit* (lekhya) maṇḍaleṣu ... na likhya; L *omits* bhāvyamaṇḍaleṣu ... caitat.
142. V bhadbhāvanā noktā ; W °bhāvanā noktā ; G *supplies* nā *in margin and reads* °bhāvanā noktā.
143. E G W °patti.
144. Bhatt. B N O X *omit* naivaṃ ; C V W naiva.
145. Bhatt. bhagavato.
146. C *omits* vajra ; R vajradhābhū°.
147. B C W uktāṃ.
148. Bhatt. °pattau.
149. C *omits* vajra(pra)
150. Bhatt. M avatiṣṭhaty ; B D L N O R X avatiṣṭha ; C ayamavatiṣṭha ; G V upatiṣṭhata.
151. V W evama.
152. Bhatt. uktā kaiścit ; D *omits* tu ; L uktā kaścit ; M N O uktā kaścit tu.
153. V kecid.
154. C sanyate.
155. Bhatt. °maṇḍalam.

チベット訳テキスト

1.1 'dir ni chung ngu dang 'bring po dag gi rim pas ting nge 'dzin legs par bsgom pa las shes rab mchog dang ldan pa la/ bcom ldan 'das kyis/

spro[1] dang bsdu ba'i byed pa po// rnam pa kun gyi mchog ldan pa//

ye shes skad cig gis rdzogs pa// (126,4) rdzogs pa'i rnal 'byor zhes brjod do//

zhes gsungs so//

1.2 de yang bdag dang sems can thams cad rdo rje 'dzin pa nyid thob par 'dod pa'i spro ba dang ldan pas/ phung po dang khams dang skye mched la sogs pa gzugs brnyan lta bur stong pa nyid dang ro cig[2] par nges par byas nas 'od gsal ba[3] la rab tu zhugs te/ skad cig gis[4] lag dang bcas pa'i gzhal yas khang gi dbus su dkyil 'khor dang dkyil 'khor pas yongs su bskor ba'i dpal rdo rje sems dpa' dang 'jam pa'i rdo rje la sogs pa'i sku stong pa nyid dang/ snying rje ro cig[5] pa'i bde ba chen po'i rang bzhin rigs kyi bdag pos dbu brgyan cing thugs ka'i sa bon dang ldan pa la de bzhin gshegs pa dang/ lha mo dang/ byang chub sems dpa' dang/ khro bo la sogs pa dpag tu med pa spros te/ ji ltar gzhan la phan par nus pa'i chos ston pa la sogs pas gzhan bsod nams kyi tshogs mthar phyin pa la gzhag[6] cing/ bsdu ba[7] byas pas bsam gyis mi khyab pa'i skur bskyed par bya'o//

1.3 de la 'di'i yan lag la sogs pa ni sa 'og gi mthar thug par ji ltar mngon par 'dod pa'i rgyar// gcig tu sra zhing mkhregs la 'bar ba'i rdo rje'i rang bzhin gyis[8] sa gzhi dang bskal pa'i mtha'i me 'bar ba'i 'od zer gyi phreng ba dang ldan pas mtshams bcing ba dang/ sa 'og nas steng gi bar du shin tu mtho zhing mkhregs la sra zhing 'bar ba'i rdo rje ra ba dang/ rdo rje'i ra ba'i steng du bar mtshams med par dum bu gcig tu gyur cing steng du rdo rje'i mda'i dra ba dang/ 'og tu rdo rje'i bra res brgyan pa'i rdo rje'i gur 'bar ba'o// de'i nang du gnas pa'i sna tshogs chu skyes dang nyi ma la gnas pa'i 'khor lo rtsibs bcu pa ser po g'yas skor du 'khor ba'o//

1.4.1 de'i shar gyi rtsibs la gshin rje mthar byed nag po/ zhal dkar po dang dmar po rdo rje'i tho ba nag po dang ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa'o//

1.4.2 lho'i rtsibs la shes rab (126,5) mthar byed dkar po zhal nag po dang dmar po/ rdo rjes mtshan pa'i dbyug pa dkar po dang/ ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa'o//

1.4.3 nub kyi rtsibs la padma mthar byed dmar po zhal sngon po dang dkar po padma dmar po dang ral gri dang nor bu dang 'khor lo 'dzin pa'o//

1.4.4 byang gi rtsibs la bgegs mthar byed nag po zhal dkar po dang dmar po khro bo'i rdo rje dang ral gri dang nor bu dang padma 'dzim pa'o//

1.4.5 mer 'dod pa'i rgyal po sngon po zhal dkar po dang dmar po lcags kyu dang ral gri[9] dang nor bu dang mtsho[10] skyes 'dzin pa'o//

1.4.6 bden bral du dbyug po sngon po nag po zhal dkar po dang dmar po/ dbyug pa sngon po dang ral gri dang nor bu dang chu skyed 'dzin pa'o//

1.4.7 rlung du stobs po che nag po zhal dkar po dang dmar po/ rtse gsum pa dang ral gri dang nor bu dang padma[11] bsnams pa'o//

1.4.8 dbang ldan du mi g'yo ba sngon po zhal dkar po dang dmar po ral gri dang rdo rje dang[12] nor bu dang padma 'dzin pa'o//

1.4.9 steng du gtsug tor 'khor los sgyur ba ser po zhal sngon po dang dmar po/ 'khor lo ser po dang ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa'o//

1.4.10 'og tu gnod mdzes rgyal po sngon po zhal dkar po dang dmar po rdo rje dang ral gri dang nor bu dang padma bsnams pa'o//

1.4.11 de la gtsug tor dang 'dod pa'i rgyal po dang mi g'yo ba dang gnod mdzes rnams ni rin po che'i cod pan can/ rin po che sna tshogs kyis brgyan par gyur pa/ mche ba cung zad gtsigs pa ston pa sma ra dang bral ba'o// de las gzhan pa rnams ni mi sdug pa'i gzugs can smin ma 'khyog pa dang bcas pas[13] dbu skra dmar ser gyen du brdzes pa/ smin ma dang smra ra dmar ser dang bcas pa/ zhal gdangs pa/ mche ba gtsigs pa/ ljags 'gyur ba/ gad rgyangs dang ldan pa/ drag po'i klu brgyad kyis brgyan pa sku bong thung zhing rags pa lto ba 'phyang ba'o//

bcu po 'di dag ni g'yon brkyang[14] ba g'yas bskum pas rtsibs[15] kyi rtse mo la (127,1) cung zad ma reg pa'i sna tshogs padma dang/ nyi ma'i gdan dang bcas pa brtan par gnas pa/ nyi ma'i 'od can shin tu khros pa dang 'bar bas shin tu 'jigs pa bskal pa 'jig pa'i dus kyi me lta bu'i 'od dang ldan pa'i rang gi sku'i sprul pa dpag tu med pa'i tshogs kyis kyang khams gsum mtha' yas pa na gnas pa'i bgegs kyi tshogs ma lus pa yang dang yang du brlag par byed pa phyag drug pa rtsa ba'i phyag dag gis rang dang 'dra ba'i shes rab ma[16] la 'khyud pa zhal gsum pa khyad par du rtsa ba'i zhal gyi mdog ni sku mdog ni sku mdog lta bu ste/ g'yas pa dang g'yon pa yi ni gong du brjod do// zhal re re la 'ang dmar la zlum pa'i spyan gsum mo//

1.5 'khor lo yang rgyun mi 'chad par drag tu 'khor bas brtan par gnas pa lta bu[17] 'bar ba'i tshogs dpag tu med[18] pa 'phro ba'o// de'i lte ba'i nang du 'og gi rtsibs kyi steng du chos 'byung gru gsum dkar po shin tu yangs pa'i nang du 'og gi zur la gnas pa'i sna tshogs padma'i[19] steng du sna tshogs rdo rje dang bcas pa'o// rdo rje de'i phyogs kyi

rwa[20] rnams dang lte ba ni ji ltar rigs par rnam par snang mdzad la sogs pa'i mdog dang 'dra ba'o// der rin po che kha dog[21] lnga las yongs su rdzogs pa thub pa'i dbang po'i[22] dkyil 'khor 'od gsal ba phyogs kyi 'khor lo thams cad sna tshogs pa'i 'od zer gyis khyab pa'i gzhal yas khang ngo//

2.1 de'i dbus su bcom ldan 'das dpal rdo rje sems dpa' 'jam pa'i rdo rje'i sku gur kum[23] kyi mdog lta bu g'yas dang g'yon kyi zhal nag po dang dkar po/ rtsa ba'i phyag dag gis rang dang 'dra ba'i shes rab ma[24] la 'khyud pa ral gri dang mda' dang utpala dang gzhu 'dzin pa rin po che'i cod pan can/ rin po che sna tshogs pas brgyan pa/ 'od zer mtha' yas pa'o//

2.2.1 de'i shar gyi phyogs su rnam par snang mdzad[25] dkar po g'yas pa dang cig shos kyi zhal (127,2) nag po dang dmar po phyag rnams na 'khor lo rtsibs brgyad pa dkar po dang/ ral gri dang nor bu dang padma'o//

2.2.2 lhor rin chen 'byung ldan ser po rin po che maragata[26] zur dgu pa dang/ ral gri dang 'khor lo dang padma 'dzin pa'o//

2.2.3 nub tu snang ba mtha' yas dmar po padma dmar po dang ral gri dang nor bu dang/ 'khor lo 'dzin pa'o//

2.2.4 byang du don yod grub pa ljang gu ral gri dang 'khor lo dang nor bu dang padma 'dzin pa'o// 'di gsum gyi g'yas pa dang cig shos kyi zhal ni nag po dang dkar po'o//

2.2.5 de bzhin gshegs pa 'di dag thams cad rin po che'i cod pan dang ldan pa rin po che sna tshogs kyis brgyan pa'o//

2.3.1 mer spyan ma rnam snang dang mtshungs pa'o//

2.3.2 bden bral du mā ma kī mi bskyod pa lta bu utpala dmar po dang/ ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa ste/ sgrub thams cad las de ltar bshad pa'i phyir ro//

2.3.3 rlung du gos dkar mo snang ba mtha' yas dang mtshungs pa'o//

2.3.4 dbang ldan du sgrol ma rin chen 'bhung ldan lta bu utpala ser po ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa'o//

2.4.1 dbus kyi rim pa las phyi rol du me'i mtshams su gzugs rdo rje ma rnam par snang mdzad lta bu rin po che'i me long dang ral gri dang nor bu dang chu skyes 'dzin pa'o//

2.4.2 srin por sgra rdo rje ma mi bskyod pa lta bu pi wang sngon po dang ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa'o//

2.4.3 rung du dri rdo rje ma rin chen 'byung ldan lta bu dri chab kyi dung ser po dang ral gri dang 'khor lo dang/ chu skyes 'dzin pa'o//

2.4.4 dbang ldan du ro rdo rje ma snang ba mtha' yas dang mtshungs pa ro'i snod dmar

po dang ral gri dang nor bu dang 'khor lo 'dzin pa'o//

2.4.5 shar sgo'i g'you logs su reg bya rdo rje ma don yod grub pa dang mtshungs pa gos sna tshogs dang ral gri dang nor bu dang chu skyes 'dzin pa'o//

2.4.6 shar sgo'i g'yas logs su chos gyi dbyings kyi rdo rje ma rdo rje sems (127,3) dpa' dang mtshungs pa chos 'byung dkar po dang ral gri dang nor bu dang chu skyes 'dzin pa'o//

2.5 'jam pa'i rdo rje la sogs pa'i lha 'di rnams ni zhal gsum pa phyag drug pa phyag mtshan dang po gnyis ni g'yas pa dag gis so// gzhan gnyis ni g'yon pa dag gis 'dzin pa'o// thams cad kyi rtsa ba'i zhal ni sku mdog bzhin no//

2.6 shar la sogs pa'i sgo ru gshin rje mthar byed dang shes rab mthar byed dang padma mthar byed dang bgegs mthar byed rnams so//

2.7 'jam pa'i rdo rje dang rnam par snang mdzad dang lha mo bcu po rnams[27] ni zla ba'i dkyil 'khor la rdo rje skyil mo[28] grung gis bzhugs pa'o// gzhan ni nyi ma la'o// zla ba dang nyi ma'i 'og tu sna tshogs padma'o//

de bzhin gshegs pa rnams kyis gtso bo'i phyag dag gis rang 'od kyi shes rab dag la 'khyud pa ste de bzhin du shes rab rnams rang[29] 'od kyi thabs la'o//

3.1 dbu la rigs kyi bdag po ste 'jam pa'i rdo rje la sogs pa'i de bzhin gshegs pa rnams dang māmakī dang sgra rdo rje ma dang/ bsrung ba'i 'khor lo'i khro bo brgyad la ni mi bskyod pa'o//

3.2 spyan ma dang gzugs rdo rje ma dang gzhin rje gshed rnams la ni rnam par snang mdzad do//

3.3 dri rdo rje ma la ni rin chen 'byung ldan no//

3.4 gos dkar mo dang ro rdo rje ma dang padma mthar byed rnams la 'od dpag med do//

3.5 sgrol ma dang reg bya rdo rje ma la ni don yod grub pa'o//

3.6 chos kyi dbyings kyi rdo rje ma la ni rdo rje 'dzin pa'o// gzhan ni mi bskyod pa'o//

3.7 'dir rdo rje sems dpa' ni sku mdog dkar po la cung zad dmar po'i[30] mdangs dang ldan pa g'yas pa dang cig shos kyi zhal ni sngon po dang dmar po gtso bo'i phyag dag gis rang 'od kyi shes rab la 'khyud pa rdo rje sngon po dang ral gri dang nor bu dang padma 'dzin pa sna tshogs padma dang/ zla ba'i gdan la rdo rje skyil krung gis bzhugs pa zla ba'i mdog can rin po che'i cod pan dang/ rin po che'i (127,4) rgyan dang ldan pa dbu la mi bskyod pas rgyas btab pa'o//

4.1 'dir 'jam pa'i rdo rje'i thugs kar dam tshig sems dpa' lta bu'i ye shes sems dpa' de'i thugs kar zla bar ral gri'i yu ba la gnas pa'i sa bon maṃ ngo//

4.2 rtag pa dang rin 'byung dang/ 'od dpag med dang don yod grub pa dang mi bskyod pa rnams kyi thugs kar phyag mtshan la ji ltar rigs par zla ba 'am/ nyi ma la/ brūṃ oṃ/ dzrīṃ[31] kham hūṃ ngo//

4.3 spyan la sogs pa'i lha mo rnams/ lāṃ/ māṃ[32]/ pāṃ/ tāṃ/ dzaḥ[33]/ hūṃ baṃ hoḥ khaṃ raṃ mo[34]//

4.4 khro bo rnams la hūṃ ngo//

4.5 lha thams cad kyi snying po'i sngags ni rdo rje[35] phreng bar bshad do//

4.6 'dir rdzog pa'i rnal 'byor du mig la sogs pa byin gyis brlab pa dang// ye shes sems dpa' dgug gzhug la sogs pa ni ma bshad do// de med kyang mig gi mngon par shes pa la sogs pa'i yon tan gyi tshogs dpag tu med cing bsam gyis mi khyab pas mdzes par byas pa'i yi dam gyi lha'i sku cig car kho na la legs par yongs su dag cing rnam pa thams cad yongs su rdzogs par rgyun du yang dang yang lhag par mos pa brtan par bya'o// snying po'i sngags la sogs pa bstan[36] pa ni bum pa lhag par gnas pa la sogs pa la nye bar mkho ba'i ched[37] du'o//

5.1 gang gi tshe dbus su de bzhin gshegs pa gzhan gtso bor gyur pa de'i dbus su gnas pa gzhan de'i gnas su dgod do// 'od dpag med dkar por yang 'gyur te/

chos rnams dkar po'i rang bzhin gyis// 'dir ni ngag gi dbang phyug dkar//

zhes gsungs pa'i phyir/ 'di dang 'chad pa'i dkyil 'khor rnams su gang gi dkyil 'khor ba'i lha'i gtso bo'i gnas gang du bshad pa de nyid du[38] gtso bo de dkyil 'khor gyi dbang po la mngon par phyogs shing dang 'khyud pa ni de la mngon du phyogs pa nyid de gzhan gyi gnas su phyin pa'i phyir ro//

5.2.1 'dir ni (127,5) gzhal yas khang gi yan lag rnam pa[39] gsum ste rdo rje'i sa gzhi la sogs pas yongs su bskor ba'i rdo rje'i gur dang/ bsrung ba'i 'khor lo dang/ chos 'byung ngo// de la rdo rje'i gur ni 'chad par 'gyur ba'i gshal yas khang thams cad la'o// bsrung ba'i khor lo dang/ chos 'byung ni 'ga' zhig kho na la 'chad do//

5.2.2 bri bar bya ba'i gzhal yas khang rnams la ni chos kyi dbyings kyi ngo bo chos 'byung ngam chos kyi dbyings kyi khongs su chud par mtshon pa'i ched du rdo rje phreng ba bri bar bshad do[40]//

ji ltar phyi rol de bzhin nang/

zhes pas rdzogs rim[41] kyi dkyil 'khor rtogs par bya ba'i ched du 'jig rten khams kyi khor yug mtshon pa'i phyir[42] rdo rje phreng ba bri ba ni nges par ro//

5.2.3.1 'dir bsrung ba'i 'khor lo ni de ltar ma yin pas/ bri mi dgos te/ bgegs bzlog pa ni gzhan gyis kyang byed pas so// gzhan yang stong pa nyid kho na/ bcom ldan 'das kyis[43] bgegs kyi tshogs ma lus pa rtsa ba dang bcas pa brlag par byed pa'i nus pa rab

tu gyur pas/ de la lhag par mos pa brtan pa nyid bskyed pa'i ched du bri ba'i dkyil 'khor la bsrung ba'i 'khor lo bri bar ma bstan to// bsgom bya'i dkyil 'khor la yang kha cig tu bsgom par gsungs pa las thams cad du ma yin no//

5.2.3.2 bgegs bsal ba'i rjes la stong pa nyid la rab tu zhugs pas bsgom par bya ba'i dkyil 'khor la bsrung[44] ba'i 'khor lo med de de'i phyir mi 'dri'o zhe na/ de ltar na khor yug mtshon[45] pa'i rdo rje'i ra ba yang mi 'dri bar 'gyur ro//

5.2.3.3 yang na gzhal yas khang bskyed pa'i dus su de yang bskyed do zhe na/ ma yin te/ bcom ldan 'das kyis rdo rje ra ba lan gnyis[46] bskyed par ni gang nas kyang ma gsungs so// lan gnyis bskyed pas ci zhig bya cig car rdzogs pa nyid kyang rdo rje'i sa gzhi dang mtshams bcing ba dang rdo rje'i ra ba la (128,1) sogs kun brtags mtha' dag stong pa nyid kyi rang bzhin sgyu ma'i ngo bor gnas pa nyid do[47]// des ni bsrung[48] ba'i 'khor lo yod kyang dkyil 'khor du mi bri[49] ba'i 'thad pa brjod pa nyid do//

5.2.3.4 kha cig ni kha cig la bsrung[50] ba'i 'khor lo bri bar bya'o zhes 'dod do zhes bya ba ni 'jam pa'i rdo rje'i dkyil 'khor ro//

テキスト校註

1.D spro ba.
2.D ro gcig.
3.D 'od rab tu gsal ba.
4.D gi
5.D ro gcig.
6.P N bzhag.
7.P N bsdu ba'i.
8.P N gyi.
9.P gril.
10.D mtshe.
11.P pas.
12.D omits rdo rje dang.
13.P N pa.
14.P brgyang.
15.P rtsebs.
16.P N *omit* ma.
17.D bur.
18.D tshogs dang gtu med.
19.P N pa'i.
20.D ra.
21.D dag.
22.P po'i.
23.D gur gum.
24.P N *omit* ma.
25.P rnam par sna mdzad.
26.D margata.
27.P N lha dang lha mo mams.
28.D *omits* mo.
29.D *omits* rang.
30.P N ba'i.
31.P N buṃ oṃ/ dzre.
32.P N laṃ/ maṃ.
33.P dza.
34.D maṃ.
35.D rje'i.
36.P N brtan.

37. P N phyed.
38. D dag.
39. P N *omit* pa.
40. D bri bar bya'o.
41. P N rims.
42. P N *omit* phyir.
43. P N kyi.
44. D srung.
45. D mchon.
46. D gsum.
47. P omits do.
48. D srung.
49. D 'dri.
50. D srung.

付 記

本稿は国立民族学博物館における平成五年度共同研究「南アジアにおける宗教図像の研究」（代表・立川武蔵）、および平成五年度文部省科学研究費補助金による国際学術研究「マンダラと理論と実践の比較研究」（研究代表者・立川武蔵、課題番号 05054013）による研究成果の一部である。立川武蔵先生には資料の収集に御助力賜った。記して謝意を表します。

引用文献

酒井真典　1956　『チベット密教教理の研究』高野山出版社。

立川武蔵　1993　「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界マンダラ」和訳」『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』（平成３・４年度科学研究費補助金〔一般研究Ｂ〕研究成果報告書、研究代表者　宮治昭）pp. i－xiii。

塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編　1989　『梵語仏典の研究Ⅳ　密教経典篇』　平楽寺書店。

森　雅秀　1989　「『完成せるヨーガの環』（*Niṣpannayogāvalī*）第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト」長野泰彦・立川武蔵編『法界語自在マンダラの神々』（国立民族学博物館研究報告別冊７号）pp. 235-282。

森　雅秀　1991a　「インド密教における建築儀礼―*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』　111：53-73。

森　雅秀　1991b　「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容３　チベット・ネパール編』（立川武蔵編）　佼成出版社、pp. 293-324。

森　雅秀　1992a　「『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ儀軌四百五十頌』」『印度学仏教学研究』40(2)：188-191。

森　雅秀　1992b　「インド密教における結界法―*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(2)」『名古屋大学文学部研究論集』114：89-109。

森　雅秀　1992c　「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57：73-90。

Bahulkar, Shrikant 1979 Concept of Dharmodayā (Chos ḥbyun). *Report of the Japanese Association for Tibetan Studies* 25：13-16.

Bendall, C. 1883 *Catalogue of Buddhist Sanskrit Manuscripts.* Cambridge : Cambridge University Press.

Bhattacharyya, B. 1968 (1925) *Sādhanamālā,* 2 vols.. Gaekward's Oriental Series Nos. 26, 41. Baroda : Oriental Institute.

Bhattacharyya, B. 1972 (1949) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta.* Gaekward's Oriental Series No. 109. Baroda : Oriental Institute.

Bühnemann, G. & M. Tachikawa 1991 *Niṣpannayogāvalī : Two Sanskrit Manuscripts from Nepal.* Bibliotheca Codicum Asiaticorum 5. Tokyo : The Centre for East Asian Cultural Studies.

Cowell, E. B. & J. Eggeling 1875 Catalogue of Buddhist Sanskrit Manuscripts in the Possession of

the Royal Asiatic Society (Hodgson Collection) *Journal of the Royal Asiatic Society* 8 : 1-52.

Filliozat, J. 1941 *Catalogue du fonds sanscrit, fascicule I, nos l á 165.* Paris : Librarie d'Amérique et d'Orient.

Institute for Advanced Studies of World Religions (IASWR) 1975 *Buddhist Sanskrit Manuscripts : A Title List of the Microfilm Collection of The Institute for Advanced Studies of World Religions.* New York : IASWR.

Mallmann, Marie-Térèse de 1964 *Étude iconographique sur Mañjuśrī.* Publication de l'ecole frangais d'Extrême-Orient Vol. 55, Paris : École frangais d'Extrême-Orient.

Matsunaga, Yūkei 1978 *The Guhyasamāja Tantra, a New Critical Edition.* Osaka : Toho Shuppan.

Matsunami, Seiren 1965 *The Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library.* Tokyo : Suzuki Research Foundation.

Meisezahl, R. O. 1976 Akṣobhya-Mañjuvajra. Ikonographie und Ikonologie des Ekonavimśadātmakamañjuvajramaṇḍala. *Oriens* 25/26 : 190-274.

Meisezahl, R. O. 1980 *Geist und Ikonographie des Vajrayāna Buddhismus.* Sankt Augustin : VGH Wissenshaftsverlag.

Nambiyar, R. 1950 *An Alphabetical List of Manuscripts in the Orientsl Institute Baroda.* Vol. 2. Baroda : Oriental Institute.

Poussin, de la Vallee 1896 *Pañcakrama.* Gand : Universite de Gand.

Pūrnaratnavajrācārya ed. 1966 *Bṛhatsūcīpatra,* Vol. 7, Pt. 2. Kathmandu.

Takaoka, Hidenobu 1981 *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal,* Vol. 1. Nagoya : Buddhist Library.

Yoshizaki, Kazumi 1991 *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscrirts in the Asha Archives (Asha Saphu Kuthi), Cwasa pasa, Kathmandu, Nepal.* kumamoto : Kurokami Library.

〈キーワード〉

Niṣpannayogāvalī, Abhayākaragupta, Mañjuvajramaṇḍala